

TZ ほんの窓

第 8 号 (2006.1.5) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

疫病と世界史

近年、進化生物学、形質人類学、生態学など、自然科学の知見を活かした斬新な歴史書に注目が集まっています。そのきっかけは何といても、進化生物学者ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄 - 1 万 3000 年にわたる人類史の謎』(上下巻、倉骨彰訳、草思社、2000 年)【2000:186】の刊行でした。しかし、科学者の取上げるトピックスや発想が歴史家にとって目新しいものばかりとはかぎりません。ここでは、ダイヤモンドも重視する疫病と世界史の関連に着目し、この分野の歴史家の仕事と成果を紹介しましょう。



【2000:186】

人類と文明の進歩 ダイヤモンドの著書は超長期の歴史叙述であり地球規模の歴史の謎解きです。地球上の各地域(あるいは文明)では発展のスピードがまったく異なっていました。ユーラシア大陸の人びとは銃の威力と鉄製の移動手段をもって、また原住民が免疫をもたない病原菌を持ち込むことによって他の大陸の人たちを圧倒した。はるか昔は同じような状態にあったと想定される人間集団間にいまや大きな格差が存在している、それはなぜなのだろうか。著者は、人種の優劣など幻想と考へ、地形や動植物相、病原菌の生態地理を含む環境要因を重視する。環境と人口と技術革新の相互作用から人類と文明の進歩を語ろうというのである。

文明の遭遇 旧大陸ヨーロッパが新大陸の文明と遭遇したとき、なぜ軍力において圧倒的に劣るスペイン軍がいつも簡単にアステカ帝国やインカ帝国を征服することができたのかは、ダイヤモンドの本の主要なストーリーの一つとなっています。しかし同様の問題提起は、すでに歴史家ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』(佐々木昭夫訳、新潮社、1985 年)【Qc:187】によってなされていました。同書でマクニールは、文明圏は病原菌の常住地でもあり、したがって文明の遭遇は病原菌への遭遇でもあったという観点から、壮大で影響力の大きな歴史論を展開したのです。歴史家をして疾病とその歴史への影響に目を向けさせることとなった、画期的な著作でした。



スペイン軍を率いた
エルナン・コルテス

黒死病 文明と文明の遭遇による感染症の爆発的流行というモデルにぴったり当てはまるのが、ペストの流行でしょう。ローマ帝国におけるそれを第一次とすると、第二次流行は中世の黒死病に始まります。このペストの起源は中央アジアあたりにあったといわれ、クビライ・カーンの、西はハンガリーまで及んだ 2 つの文明をまたぐ帝国づくりがその背景にありました。第二次流行期にはより多くの記録が残されていて、その歴史に与えた影響はかなりわかっています(ハンス・ジンサー『ネズミ・シラミ・文明 - 伝染病の歴史的伝記』(橋本雅一訳、みすず書房、1984 年(初版 1966 年))【生態学/947:83】、村上陽一郎『ペスト大流行 - ヨーロッパ中世の崩壊』(岩波新書、1983 年)【0800:33 黄 225】)。

ペストと動物



【2000:186】

ペストの生態についても、ネズミの発症に始まり、ノミを媒介として人間へ感染するということが通念となっています。けれども、それは20世紀の流行(第三次の流行)ではたしかめられていますが、14世紀から18世紀までの第二次流行期にかんしてはまだ不明な点が残っていて、黒死病を人間にもたらしたのがどの動物なのか判然としないのだそうです。ネズミ説への疑問を述べているのは見市雅俊『ロンドン=炎が生んだ世界都市-大火・ペスト・反カソリック』(講談社選書メチエ、1999年)【2330:95】です。これは、インフルエンザの長い歴史と最近の鳥インフルエンザの騒ぎとを思いださせる指摘ではないでしょうか。

「コロンプスの交換」

文明の遭遇は未知のモノの交換を伴います。新大陸の発見によって、旧大陸はジャガイモやトウモロコシといった収量の多い作物、あるいはタバコのような社会的インパクトの大きな作物を得ました。これにたいして新大陸が受けとったのは、その人びとがまったく知らなかった天然痘のような病原菌でした。つまり、まったくの不等価交換だったわけです。この不等価交換とその帰結を、歴史家アルフレッド・W・クロスビー(A. W. Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*, Westport, Conn.: Greenwood, 1972)は「コロンプスの交換」と呼びました。このような「交換」は病原菌以外の生物をも巻き込んで、オーストラリア大陸などでもみられました。同じ著者の『ヨーロッパ帝国主義の謎-エコロジーから見た10~20世紀』(佐々木昭夫訳、岩波書店、1998年)【2300:225】は、白人の入植者が持ち込んだ家畜や雑草もヨーロッパの帝国主義的拡張を助ける役割を演じたと論じています。



【2000:225】

開発と疫病

近代アジアもヨーロッパ帝国勢力の下にありましたが、この時代には新たに「開発」が登場します。それに応じて、帝国と開発が疫病とどうかかわっていたのか、その人間社会へのインパクトは何だったのかが問題となります。これは近年、わが国の研究者が相次いで本格的な著作を発表している研究領域で、見市雅俊・斎藤修・脇村孝平・飯島渉編『疾病・開発・帝国医療-アジアにおける病気と医療の歴史学』(東京大学出版会、2001年)【4900:852】、脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治-開発の中の英領インド』(名古屋大学出版会、2002年)【2230:99】、飯島渉『マラリアと帝国-植民地医学と東アジアの広域秩序』(東京大学出版会、2005年)【4900:1168】などをあげることができます。開発は経済的な便益を求めて始められるものですが、これらの研究はそれが疫病の蔓延という、思わぬ結果をもたらすことがあったと指摘しています。現在の開発途上国の問題を考えるうえでも重要な視点といえましょう。



【4900:852】

(経済研究所教授 斎藤 修)

関連図書

- ・見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社、1994年)【2090:68】
- ・デイヴィッド・アーノルド『環境と人間の歴史』(飯島昇蔵・川島耕司訳、新評論、1999年)【2300:247】
- ・飯島渉『ペストと近代中国-衛生の「制度化」と社会変容』(研文出版、2000年)【4900:894】
- ・アルフレッド・W・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ-忘れられたパンデミック』(西村秀一訳、みすず書房、2004年)